

現代におけるイニシエーションの制度的困難と 発動契機への個人的遭遇*

——文献的展望による青年期理解の試論——

中 島 義 実¹⁾

1. はじめに

イニシエーションという語は広義には「従来までの社会状況から他の新たな社会状況への加入・参加をするために所定の手続きをふむ一連の行為体系」(小口・堀[監], 1973)とされるが、狭義には「成人式がこの用語の主たる内容になっている」と言われている。

青年期理解の道具立てとして様々な用語が存在し用いられてきた中に、この語を鍵語として青年期を理解しようとする一連の流れが存在してきたことも、その意味では突飛なことではない。

一方でこのイニシエーションという語にまつわるイメージは、この数年の社会的事件をとおして、ある強烈な色を帯び、大きな印象を残している。事件以降、この語を用いるには慎重にならざるを得なかったのは、致し方ないことであったとも感じる。しかしまた、事件の前面を賑わしていたのが主として青年たちであったことから、慎重でなければいけないながらも、やはりこの語は青年期と関係の深いものとして見過ごしにはできないものであるとも感じられたのである。

筆者もまたかつて、やはり事件以前に、この語を鍵語とする青年期理解を論ずる試みをおこなった(中島, 1992)。しかし公に発表する以前に事件をまのあたりすることとなり、公表するには慎重であらねばと感じた。事件とそれをめぐる諸言説とを踏まえた全面考察がなければ論ずる価値はないかとも感じた。しかしながら数年を経る中で、事件の背景とも考えられる状況が、事件以前と一変あるいは消失してしまったかといえ、必ずしもそうではなからうことに気がついた(たとえば、諸富[1996]は、事件当事者である団体に属した青年たちの心性は、一般大学生においても、自分達の中に少なから

ずあるものとして感じてられいるものであることを指摘し、そのことを無視せず取り組むことの重要性を説いている)。

状況が失われていない中で、用語だけがタブーとなってしまうことがあるならば、むしろ我々の認識は、状況に接近する道具を一つ失い、状況とより距離の離れたものとなるであろう。事実自体いまだ全貌の明かでない事件の総括をまたなくとも、青年期理解の道具立てとして、この語をいまいちど洗いなおしておくことが無意味であるとはならぬであろう、と考え至った。

そこで本論において、イニシエーションを鍵語とする青年期理解の試みがいかなるものであったのかを文献的に概観考察し、今後の青年期研究・臨床また教育において、この道具立てにいかなる用い方の可能性が考え得るか、展望をはかろうとするものである。

2. イニシエーションを鍵語とする青年期理解の流れ

(1) 河合隼雄らによる用語導入—治療論の文脈で

この語が青年期理解の道具立てとして用いられる端緒を開いたのは、河合隼雄と浪花博との共訳による、Henderson (1967) の邦訳であった(1985 河合・浪花[訳],)。Henderson はアメリカのユング派分析医であるが、神話学・人類学・宗教学の知見と臨床資料とを駆使して、「心理学上の発達において起こる本質的な変化を明らかに示す」ものとして「現代のイニシエーションの経験」の詳説をおこなった。これは、わが国におけるこの語を用いたその後の諸論考において、常に第一の典拠として位置づけられることになる。ここにおいて注目されるのが、Henderson 自身の文脈中には、イニシエーションを心理療法論における重要な事象として論じる視点と同時に、先の引用にもみられるように、発達を捉える視点もまたはらまれていたことである。心理療法の理論において、諸派の全てが必ずしも発達を視野にいれているのではないのだが、ユング派の論者としては自然なことである。訳者自身、紹介の目的について、臨床

* 本論文は筆者が千葉大学教育学部専攻生在学時に作成した報告書(未公開)に、加筆・修正をほどこしたものである。

1) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程(後期課程)

経験を通じてこのことの重要性を感じたからであると述べる一方、個人の成長の段階において必要とするものである、とも述べ、発達理解の鍵語としての着想にも目をとめていたことがわかる。

しかし河合自身の問題意識の展開にあたっては、やはりまず心理療法論の文脈の中に、この語を位置づけることから開始されている（河合、1975）。

ここにおけるイニシエーションの内容の提示は、主として Eliade (1958) に拠りつつのものであるが、その叙述は、イニシエーション論のうちの、本質的意味と中心的体験とにしばったものとなっている。即ち、本質的意味とは、参与者の宗教的・社会的地位を決定的に変更することであり、実存条件の根本的変革にひとしいものである。また、中心となる体験は、神話に語られた原古の神話的事実を、再現して直接体験せしめることである、というものである。イニシエーションの具体的内容については、死と再生のモチーフ、根源へと戻ること、また畏敬と恐怖の感情、といったことを挙げつつ、それらが心理療法においても重要な体験として生じることで、治療の進展をみることを論じ、治療論にこの語を位置づけたのである。

一方共訳者である浪花も、同様に治療論の文脈にこの語を位置づける論を展開した（浪花、1978）。

ここにおけるイニシエーションの内容の提示は、河合同様 Eliade に主として拠っているが、河合の提示した本質的意味と中心的体験とに加え、具体的内容や手続きの4つの要素を Eliade の整理により紹介している。それによれば、4つの要素の第1は「聖所」の準備である。日常生活の場から離れた空間に参与者を隔離する。そこにおいて神話に語られた時代が再現され、先祖の神々が地上にいた聖なる時間を体験させる。第2は母親からの分離である。このとき母親には、子どもは殺されたと伝えられる。これはいわば俗的存在を死ぬことと理解される。第3は隔離と伝承の教示である。ここで部族の起源神話が語られるが、そこには部族の世界観が原理から開示されており、これが部族の一員として必要な宗教的・倫理的・社会的教育をなしている。第4は試練と身体毀損である。これをとおして死の象徴と同時に新生の象徴も体験されることが多く、また成人たるに値する能力を身につけたことの証しともされる。かくて新生者は新成人として成人の集団に統合される。これら4要素の紹介は、後に河合(1983)によって広くなされるのだが、それに先だってこのように具体的内容を描述してイニシエーションの過程を紹介していたことは注目される。

いずれにしても最初の導入においてこの語は、心理治療論の中に位置づけられたものであった。心理療法の過

程の中で、提示されたようなイニシエーションと同質の体験がクライアントの内的体験においてなされることが重要であるとしたのである。

なお、ここでいまひとつ、この語の導入に独自の位置を占めるかもしれぬものとして、福井(1980)の存在にも触れておく必要がある。というのも福井においては、この語の紹介と内容提示について、ほぼ独自になされたかのような叙述がなされているからである。イニシエーションの内容の記述には多くの紙幅は割かれていない。(試練等の)外的な要請に応えたという保障が与えられ、成人として資格の認定を受けること、そして内的欲求実現の禁忌が解かれる、特に性的欲求の充足が保証されること、というのがその全容である。典拠は特に示されず、独自の定義という印象を受ける。社会的イニシエーションの喪失と、その結果として個人にとってイニシエーションとしての意味をもつ体験を通過する必要が生じたことを説く点は河合と似てはいるものの、参照した気配はなく、その論述はやはり独自である。福井は青年期の対人恐怖症の治療例に沿いつつ論旨を展開しているが、治療論的には精神分析的であり、病理理解も精神分析を中心としている。のちに河合(1983)以降展開する青年期理解の流れは、病理論とほぼ常に表裏一体をなすものであるが、その意味で福井の試みは、イニシエーションを鍵語とする病理理解と青年期理解として先駆的であるともみられ、注目される。

(2) 発達理解への展開の萌芽

さて河合らの導入においてイニシエーションとは、心理治療における内的体験の一つとして位置づけられた。しかし内的体験といっても、それは心理治療でしばしば素材とされる夢や描画・箱庭等のようなイメージの領域における体験を指すだけでなく、クライアントが日常の中でとる行動をとおして体験される内的意味も含まれるものとして扱われるのが、先に見た治療論に共通する点であった。

このことから、導入されたこの語を、純粋に内的な体験のみを指すよりも、むしろ現実の行動、活動、出来事をとらえて、その内的意味を理解する道具立てとして用いる用法が生じてくる。

この方向での展開がはじめてみられるのが、河合(1983)である。青年期から成人期への発達とその過程における諸問題を主題とする同書において、河合雄雄はイニシエーションを重要な鍵語のひとつとして登場させる。すなわち近代社会が青年期にかかわる諸問題を抱え込むことになったのは、ひとつにはイニシエーションの意味を知ることなくこれを喪失してしまったことにある、

というのである。そしてこのことの詳説に1章を割いている。

ここにおけるイニシエーションの内容の提示は、浪花と同様、Eliadeによる4要素の紹介が中心になっている。

新たな点としては、同じくEliadeに拠りつつ、成女式に関する言及が加わったことである。女性のイニシエーションは自然の時の訪れとともに開始されるので、男性のそれが集団的になされるのに対し、女性のそれは個人的になされるという点が対比されている。

そして、そのような儀式を失った現代が、どのような困難におちいつているかについても、これまでの著作で触れられてきたところではあったが、もっとも丁寧に論じられているのは同書においてである。約すれば、イニシエーションが成り立つためには社会全体が完全な伝承社会、伝承に基づき伝承に従って完全に成り立っている社会でなければならないのだが、近代人は進歩という概念のもとに自身と社会とを位置づけ、非聖化された世界を生きる。ゆえに現代においては、制度的なイニシエーションは不可能である。むしろ現代におけるイニシエーションは、あくまで個人にとって個々に生じる。そして1回では完了せず繰り返されることが多い、ということである。

そのうえで事例を取り上げつつ、「死と再生」ともいえるような過程が生じること、そこに立ち会う絶対的権威者が必要であること、また現代においてはそのような絶対的権威者が存立しがたい困難があること、さらには、死と再生の過程は子供の側だけに限らず親の側に体験される必要が生じる場合もあること、それはやはり進歩し続け複雑さを増す現代社会ならではこのことであること、を述べる。これらの論述は、明示的ではないが、先に挙げたEliadeの4要素の叙述を背景においたものであろう。

(3) 河合による展開のその後

このようにしてイニシエーションの語は治療論に位置づけられ、さらに発達論への展開の萌芽をみた。この河合(1983)から、この語を鍵語とする青年期理解の流れが始まっていくのであるが、その前に、河合におけるこの語の使用のその後をあとづけておきたい。

① 発達論における拡張

まず発達論においては、鍵語としての使用に拡張が見られる(河合, 1989)。

ここではライフサイクル全体を論じるにあたって、青年期から成人期への移行に従来の議論を展開すると同時に、中年期における、ライフサイクルの後半への移行においても、イニシエーションが存在することを述べてい

る。つまり、ライフサイクルの随所に存在する節目ごとに、段階間の境界を突破する必要があり、そのそれぞれについてイニシエーションがあるとし、ライフサイクル全体にこの語を援用する理解を可能とする論をひらいたわけである。以降の河合においては、このライフサイクル全体に拡張された議論が引き継がれる(河合, 1991・1992)一方、青年期論における強調もやはり引き継がれ、青年像の時代的变化を加味した展開の中にも所を得ている(河合, 1994)。

② 病理論への展開

また同時に、病理論への援用もはじめて試みられた。いわゆる境界例の病理解論における試みである(河合, 1989)。

ここで河合としてははじめて(後述するように、これに先立って川崎[1988]においてなされている)、van Gennep(1909)による3段階論を提示している。すなわち、イニシエーションは、分離・周辺・再統合の3段階からなる、というものである。この3段階論は後述する青年期理解の流れにおいて重要な位置を占めることになる。そしてTurner(1967)がこの第2段階における儀式参加者の状態として挙げている、リミナリティおよびコムニタスという概念を、いわゆる境界例の(および境界例に限らず境界的状况にある個人の)病理的心性の理解に援用している。内容に立ち入ることはしないが、この病理解論も、その後引き継がれる(河合, 1991)。

もっとも、導入初期より一貫して論じられている、「イニシエートされていない人」に関する議論(Henderson, J.L., 1967, 河合, 1975・1983・1989)はある意味で病理論でもある。この議論は、いわゆる「永遠の少年」元型との関係で論じられ、一つの大きな議論の流れがこれに続くことになるので内容にふれることはしないが、これは特定の主訴や診断あるいは疾患と結びつくものではないものの、ある未発達の状態として問題を引き起こすものである、とされており、病理学的側面を有していたともいえる訳である。

③ 治療論に一貫する用法：統合の軸

このように、発達論において拡張され、病理論への展開もみたこの語であるが、同時につねに当初の治療論的位置づけを背後にもっており、これを軸に議論を統合しているのも特徴である(河合, 1992・1993)。すなわち、発達論や病理論における展開は、常に治療の実際への視角を広げ、この語の治療論的有用性を拡大するものとして試みられてもいるのである。

(4) 青年期理解の道具立てとして

以上みてきたように、河合はイニシエーションの語を、

まず治療論に、ついで発達論に、さらに病理論へと導入してきた。

そしてこのうち発達論への導入・展開が、青年期理解の道具立てとして用いる流れを導き、病理論がその発想として、その流れを下支えすることになる。(治療論においては、たとえば豊田 [1986] のような臨床事例研究に援用されつづけ、また、河野 [1977] のようなさらなる治療論的・病理論的展開を導いた)。

さて、河合の導入を受けて、青年期理解への取り組みに踏み出したのは、川崎 (1988) である。川崎がとりあげたのは、先にみた福井と同様、対人恐怖症である。これがわが国の青年期に特有に好発的であるとされている点から、わが国の青年一般の理解への応用を着想したようである。そして、成長にともなって社会での位置づけや対人関係が変化することを、イニシエーションと関連づけて考える。これらの点も福井と同様である。

しかし川崎において注目すべき点が2つあり、後の青年期理解の流れの先駆をなしている。

第1は、van Gennep (1909) による3段階論をはじめて提示し、考察の中心に据えたことである。イニシエーションは分離・周辺・再統合の3段階からなるというこの理論は、後に河合 (1989) も援用するのであるが、しかし河合においてはむしろ Turner (1967) を引くことが主眼であり、その前置きとしての位置づけが強く、3段階といっても第2段階 (周辺) に焦点をあてた論旨となっている。一方川崎は、第1段階 (分離) や第3段階 (再統合) にも焦点をあて、それらが青年の依存性や攻撃性のあり方にどのようにあらわれてくるのかを調査、考察している。

第2点は、イニシエーションを、青年期の長い期間中のある時点で起きる、ひとまとまりのインパクトの大きい出来事としてとらえる (河合は基本的にそうであった) のみならず、青年期全体の過程を捉えて、その全体を通してイニシエーションがなされていくという捉え方をしている点である。あたかも、青年期の全体が一つのイニシエーションであり、この期間が大きく、分離・周辺・再統合の3段階からなっている、との読み方も可能な叙述である。実際川崎のとった方法は、依存性や攻撃性について、中学生の群・高校生の群・大学生の群、と横断的にデータをとり、それぞれの高不安群と低不安群とを各々一連の過程をなすものと仮定して、発達の推移を描述しようとするものである。「少し大胆に」とことわりつつも、たとえば高不安群における中学から高校かけての依存性の減少を3段階論における分離の段階に、高校から大学にかけての依存性の増加を再統合の段階に、重ね合わせてみようとしている。あるいは、正常者の対人

不安が成人期に消失することを、イニシエーションの再統合段階における、参加者の相対的安定に類比するような理解もなされている。たしかに、伝承社会において子どもと成年の間にあったのがイニシエーションであり、一方近代社会ではイニシエーションを喪失した代わりに、子どもと成年との間に青年期をもつことになったと考えれば、青年期が全体としてイニシエーション的要請を持っていると考えるのも不自然ではない。そしてこのように、長い時間的過程を持つある段階の全体をイニシエーションの進む過程としてみるような視点は、この後の青年期理解の流れに共通する一つの発想とも見られる。この点でもこれは先駆的である。

つづいて、永井 (1989) がこの流れにある。永井におけるイニシエーションの内容提示は、河合 (1975) と似ており Eliade (1958) に拠っている。河合の参照の有無は明らかでない。そして事例解釈においてはむしろ精神分析的であり、この点では福井 (1980) に類似しているが、独自の点は、福井がいわゆるエディプス・コンプレックスをイニシエーションと関係づけたのに対し、永井は日本に特有のこととして、いわゆる阿闍世コンプレックスと関係づけた考察をも加えている点である。福井がイニシエーションの中心的主題を、性的欲求充足の禁忌と解除として捉えたのに対し、永井は、それに先だって母性性による支配との対決がなされる必要があることをも示した訳である。この点では「場」への依存と自立を問題とする川崎に近い点もあるといえる。ちなみに河合は、分離や「殺し」の対象となる「親」を、父性か母性に限定することはせず、双方が有り得、また実際の親個人が対象であるとも限らない、としている。

さて先にみた川崎の流れの線上で、青年期論への本格的展開をめざしたのが、岡田 (1990) と東山 (1990) である。岡田の述べるように、これらは青年の行為について、イニシエーションとして意味づけることで理解しようとする試みなのである。

特に岡田の場合、川崎の試みた2つの点、すなわち、van Gennep (1909) による3段階論に焦点をあてること (岡田は各段階に、それぞれ分離・過渡・統合の語をあてている) と、青年期の全体をひとつのイニシエーション過程として捉える視点とが、具体的考察の軸をなしており、同一の流れにあることが明瞭である。岡田は、青年の起こす行動を具体的に列挙し、それらがイニシエーションのどの段階に該当するか、当てはめる試みをしている。それによれば、規則破りやクラブ活動、旅行や家出などは、分離と過渡に相当し、服装・髪型やグルメ等は過渡と統合に該当する。職業選択は統合に属することであり、ゲーム等で体験する戦いや音楽機器等のもちも

のは、各段階どれにも該当し得る、としている。このように、ごく日常的な中にも存在することがらを具体的にとりあげ、それぞれがはらみうるイニシエーションの意味合い（常に必ずそのような意味を持っている、という論旨ではないと思われる）を考察した点、そしてそれを青年期全体の過程の中に位置づけることを試みた点で、意欲的な試みとして注目される。

一方東山も、青年期女性の、行動の理解にこの語を援用する点で岡田と同様である。また、ライフサイクル上のかなり長いまとまった期間の全体をイニシエーション過程と捉える視点もあり、やはり、川崎や岡田の同一線上にある。

しかし東山の場合、テーマを女性にしぼっているために、川崎や岡田とは異なる点も見られる。たとえば、川崎や岡田が考察の中心の一つに据えている、3段階論はここにはない。なぜなら、そもそも3段階論の抽出されたもとの事例はすべて、男性の成人儀礼だったからである。伝承社会では、女性は男性とは全く異なる過程を通じて成人となっていく。したがって現代の女性の発達を考察するのにイニシエーションを鍵語としようとするなら、やはり伝承社会の成女儀礼を参照せねばならない。この問題意識は従来中心的に扱われることこそ少なかったが、東山以前にもある流れを持っている。そこで項を改めて、この問題の整理を試みる。

(5) 成女式について

この問題に最初に言及したのは、前述のとおり河合(1983)であった。Eliade(1958)に拠りながら、女性のイニシエーションは初潮ともに開始されるので、男性のように集団的になされるのではなく、個人的になされると述べたのが、それである。また、初潮という自然の過程によって（それ自体で人間存在を超えたものを感じさせ、宗教的色彩さえ帯び得る）ため、男性の場合のような手の込んだ儀式が必要なかった、ともしている。

この後に、女性のイニシエーションへの言及が現れるのは、河合(1989)である。ここでは、ギリシャや孔子等古来のライフサイクル観も、またエリクソン等の現代のライフサイクル論も、ともに男性を対象としたものであり、女性についてのライフサイクル論は手つかずになっている、と指摘している。また、ライフサイクルを段階を区切って考える見方自体、男性的なものを見方なのではないか、とも指摘している。後者をどう考えるかは難しい問題であるが、前者については確かにこれからの課題であろう。そして河合自身、問題点は指摘したものの、そこに手をつけた形跡は今のところない。

結局それには、女性自身の手になるところの東山

(1990)を待たねばならなかったのである。

東山は河合と同様に、男性のイニシエーションが集団的なものであったのに対し、女性は身体を通して個人的にイニシエートされてきたことを指摘する。そして、初潮、出産等周期的に血を流すことに「女性なるもの」の中核があり、それは自然を体験することであると同時に宗教的体験でもあるがゆえに、手の込んだ儀式ではなかったという指摘は河合と同様である。むしろ現代にこそ、儀式的必要性は高くなっている、としている点が、自身女性であることをふまえた、論者ならではの主張であろう。そのうえで、初潮・破瓜・結婚・妊娠・出産・閉経というそれぞれの節目と、それに挟まれたそれぞれの時期について考察する訳だが、前述の通り、青年女性の行動の理解という視点や、長い期間をイニシエーションの過程ととらえる視点が、ここに用いられているわけである。

ところで次節では、本節であとづけてきた流れの整理に基づきつつ、この語を用いた発達理解の今後について、筆者なりの展望を試みるわけであるが、女性の発達の具体に関しては、河合に倣うわけではないが、男性である筆者が論ずるには、やはり手におえないものであると感じる。

そこで、課題として挙げ得ることについて本項で指摘するにとどめ、その解決はとりあえず、女性研究者の手に乗ねたい。

さて、河合の導入以来、現代では古来のイニシエーションをそのまま行う訳にはいかない点が再三再四指摘されてきた。これは女性に関しても全く当てはまることである。即ち、近代以降の、進歩の流れの中に自らを位置づける現代人は、社会の定めた一定の儀礼によってイニシエートされることはできない。社会が伝承社会でないために、そのような集会的な儀礼や制度自体が原理的に存立不可能となっているのである。そこで個人におけるイニシエーションが模索されるのであるが、現代の女性の場合さらに、古来の儀礼の参照だけではいかない点が生じている。すなわち女性の社会的立場が変動し、男性のライフサイクルモデルにもとづく社会的制度に沿った部分が、女性のライフサイクル上にも増えてきているということである。そうなると女性は、男性のイニシエーションのこともどこかで視野におかねばならないのではないだろうか。

さらにいまひとつ古来のままではいかないことの重要な指摘が、中沢(1995)によってなされている。中沢は、河合や東山と同様に、女性は男性よりも直接に自然の力に触れるが故に、男性が手の込んだ儀式や修行で自然の力に触れようとする過程をとらなくても、それを体験で

きたのだ、という。その中核をなすのはいうまでもなく、生命を生み出す力、生体にとっては「他者」である存在を受け入れ、体内に保持し得る力、免疫機構の原則に逆らってまで行われる、この力に関わることがらである。ところが現代の技術の発達、このような力さえも、人工的技術の中に取り込みつつある。従来は自然の神秘として体験できた事象が、人工物による操作可能な事象の体験に置き換えられていく方向に向かっている。すくなくとも、全くの自然の神秘ではどんどんなくなりつつあるのだ、ということを指摘しているのである。これこそが、女性のイニシエーションの問題を今後一段と深く複雑なものとするのではないだろうか。中沢はここで、ある修験道（これは従来男性にのみ明かされ女性には秘せられた修行体系であった）の門戸が近年女性に対してひらかれたことを、技術発達による女性性の特権の危機のなかで、あらためて女性性と自然との関わりを問い直す意義深いものである、としている。前段と同様の提言となるが、やはり従来男性のイニシエーションとして扱われてきた事象をも考慮に入れねばならない状況の存在を指摘しておきたい。

3. 展望：実践と研究とに向けて

前節において、イニシエーションを鍵語とする青年期理解の一連の試みついて、その前提をなしたこの語の導入から、行動理解と長期的過程の観点をもつ近年の論議に至るまで、その流れを概観してきた。本節では、それをうけて、今後この語を道具立てのひとつとしてもつことが、青年を対象とする臨床、教育、研究にいかなる展望を持ち得るか、検討してみることにした。

再三論じられてきているように、現代では、かつてのイニシエーションがはたしてきたと同じ機能を持つものを、社会的・集団的に制度としてもとうとすることは、原理的に不可能である。ここをふまえることが、教育や臨床の実践において、とくにどのような制度や体制を作るのかという議論において重要である。単一の制度や体制がこの機能を専有するのはあり得ないことなのだ。

しかし、社会的・集団的には不可能でありながら、各個人はそれぞれにおいて同質の体験を必要としている訳でもある。必要があるのに制度はない、という状況に個人がまずはおかれている。

一方、イニシエーションを失った代わりに、青年期という制度が、子供と成人との間に発生してきた。したがって青年期という制度自体には、ある程度イニシエーションが持っていた性質も残っている。また、その過程のある部分あるいは全体を通して、かつてのイニシエーションで体験されたと同質のことが達成されることが、社会

からも個人からも望まれているともいえる。あまたある発達課題論としてのアイデンティティ論やモラトリアム論を、そのように読むことも可能であろう。

しかしながら、制度としての青年期がある程度イニシエートする性質を残し、イニシエートを期待されているとしても、あらゆる個人にとってのイニシエートの十分条件を提供しているわけではない。その結果、そのような体験の有無をめぐって、種々の青年像が存在することになっている。試みに分類するならば以下になるろう。

①イニシエーション的過程を通る群

①-a：通常の生活上の出来事を体験することでその過程を通る者

①-b：不適応ないしそれに近い状況を通してその過程を通る者

（下位分類として、非社会的不適応か反社会的不適応かに分かれ得る）

①-c：不適応ないしそれに近い状況を通り、治療ないし処遇を通してその過程を通る者

（下位分類として、非社会的不適応か反社会的不適応かに分かれ得る）

②イニシエーション的過程を通らない群

②-a：結果としての不適応を生じない群

②-b：結果としての不適応を生じる群

（下位分類として、非社会的不適応か反社会的不適応かに分かれ得る）

たとえば川崎の場合は、対人不安の高い群にイニシエーション的体験の一部を見だし、対人不安の低い群にはそれが見だしにくい、としている箇所があるが、それはこの分類で言う、①-b群と②-a群とを抽出して比較を試みた、とも整理できる。

また、河合以降の流れの中では、発達論と病理論とが深く関連し合っているのを、それを受けて、イニシエーション的過程を通らないものは皆、なんらかに不適応ないしそれに近い状況を呈するのだと主張することも可能なようにも見えるが（実際そのようには言っていないのだが）、②-a群の存在を押さえておくことも重要である。樋口（1986）は、子どもの発達を論じる中で、ある意味で現代ではあらゆる個人が「英雄であること」を期待されており、それ自体が一つの偏向でもあるという。英雄となるイニシエーションに典型的な過程が、あらゆる個人の成人となる過程に期待されねばならないものもない。もとより Eliade の描く伝承社会の場合も、イニシエーション的体験を成人儀礼に集中せしめる社会以外における、イニシエーションのバリエーション（この場合生活や社会の他の部分にその体験が配置されている）

の存在は指摘されており、英雄的なものというさらにその1下位バリエーションなのである。

以上のように、イニシエーション的過程を経るかどうかをめぐっての分類をほどこしたうえで、それではその過程を通るという場合、いかなる体験をもつことが要請されるのか、先に青年期という制度だけでは十分条件ではないといったが、では何が揃えば十分条件と言い得るのか、それを検討してみたい。

ここで手がかりとなるのは、今一度 van Gennep と Turner の3段階論と Eliade の4要素論とにたちかえることであろう。

まず3段階論である。van Gennep はこれを通過儀礼の完全な理論上の図式とし、境界前・境界上・境界後、ないしは、分離・過渡・統合の語をあてた。各段階での体験を Turner にしたがって叙述すると、以下のごとくなる。

まず、第1段階の分離・境界前では、社会構造や文化的条件における以前の定位置・定状態から分離する、とされる。定常的であった、以前の社会上、文化上の立場や状態から離れ、分かれたる訳である。時間的空間的に分離されることに加えて、分離ということ象徴する行動がとられるのが通例である。

第2段階の過渡・境界上では、儀礼を通過している者

の特徴はあいまいなものとなる。以前あるいは以降の状態をわずかしかもたない、あるいは全くない文化領域を通る。この領域の性質は、死、子宮の中、不可視、暗黒、両性具有、荒野、日月の触、等で象徴される。また、この段階にある者は、無所有であること、匿名であること、均質性と仲間意識とが混和していること、神聖性と謙虚さが混和していること、等の特質をもつ、とされる。

第3段階の統合・境界後では、再び相対的に安定した状態にあり、他者に対して明白に規定された権利と義務を構造的なかたちでもつことになる。そしてその地位に結びついている規範と倫理に即することが、ここではじめて期待される。逆に言えば、この段階に至るまでに、その能力と資質とを得るわけである

このような3段階からなる過程の全体の動きを、その基本的な形で図示すると、図1のように描くことができる。分離が「上昇」のイメージのみでとらえられることをおそれるならば（実際、冥界への下降や子宮の中に再び入る、という象徴もあるので）、「下降」のイメージで図2を描いてもよい。これらが基本型ではあるが、河合の言うような、現代における繰り返し経験される場合であれば、図3のようにイメージされる。しかし条件抽出のための基本構図としては、図1の型を用いればよいであろう。

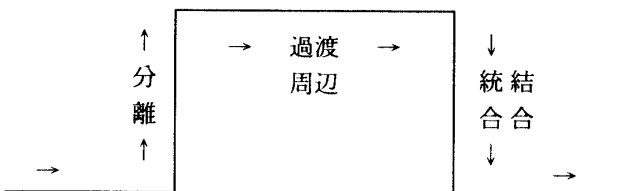


図1. イニシエーションの3段階（基本型）

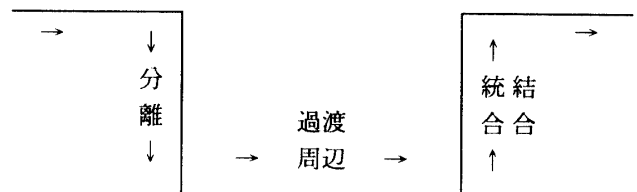


図2. イニシエーションの段階のバリエーション1（下降と上昇）

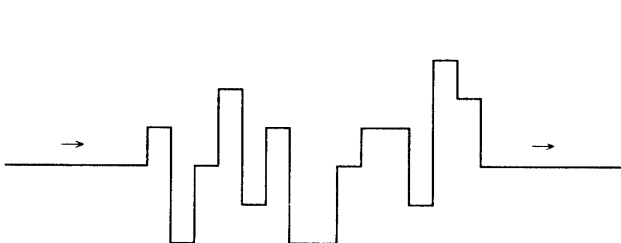


図3. イニシエーションの段階のバリエーション2（繰り返す現代型）

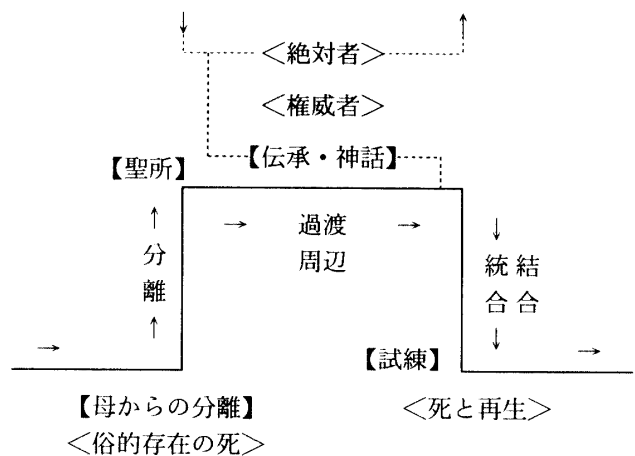


図4. 3段階と4要素（他の要素含む）の全体見取図

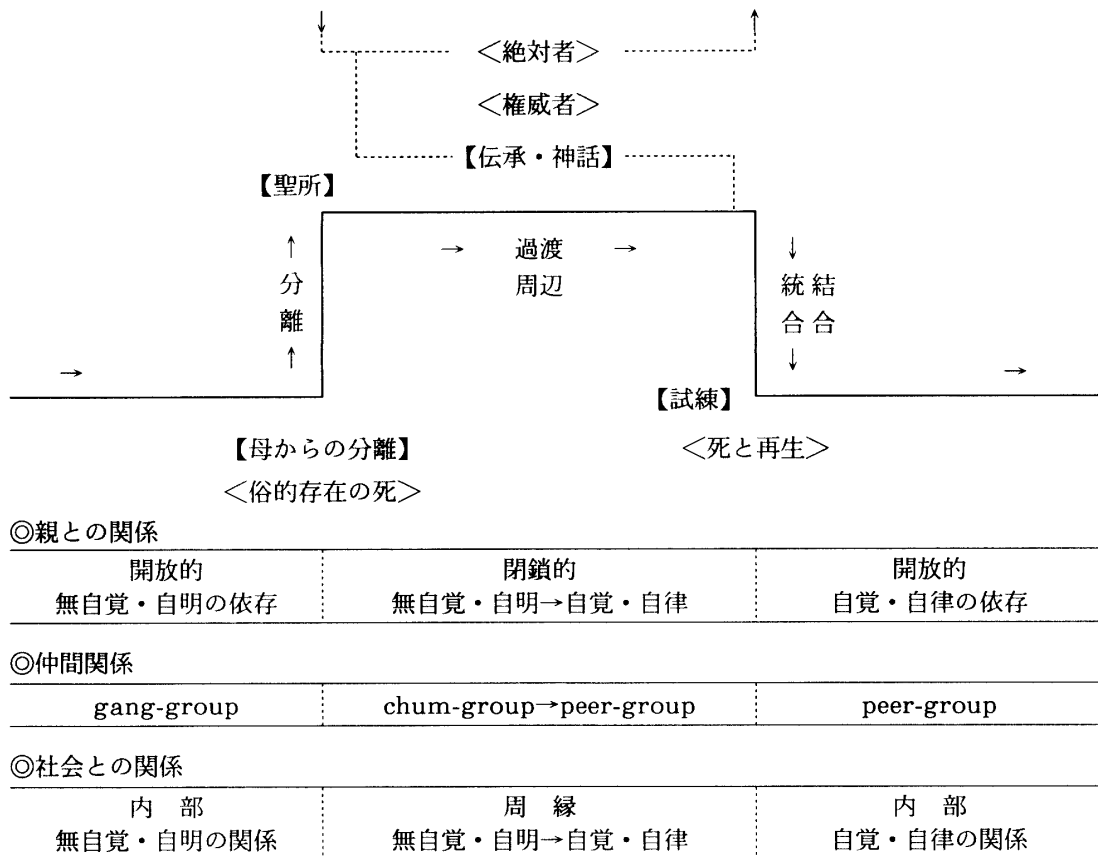


図5. イニシエーションの全体見取り図と発達の諸相

さて一方4要素は、内容的には前節に示したので再述はしないが、聖所、母からの分離、伝承・神話、試練の4つである。これらが図1の基本型の上でどこに配置されるかを示し、さらに加えて重要な要素として挙げられていた、俗的存在の死、権威者・絶対者、死と再生を配すると図4となる。これでイニシエーション体験全体の、一応の見取り図を得たことになる。

最後に、これらの発達上の意義を見いだすための補助線として、この過程に対応すると考えることのできる、発達上のいくつかの側面について併せ示すならば、ごく概略的（これらはそれぞれ厳密に論ずるならば膨大で複雑な議論と検証を要するであろうが、本稿の目的はそこにはないので、あくまであるひとつの仮設の見通しを得るための試行として描くこととする）ではあるが、図5のようになるであろう。

親との関係においては、青年期前後を通観すると様々な変動があるが、大きくまとめてみるならば、「依存から自立に向かう」というような一方向的な動きと、「一時的に親に対して閉鎖的になり（口数が減るなど）、その後再び開放的になる」という往復運動的な動きと、2種の変動を挙げることができる。このうち前者に関しては、自立を依存と対置するのは必ずしも適当ではない

と考える（高橋，1984等）こともでき、むしろ依存関係に無自覚であったり自明のものとしていたりする状態から、自覚して自律的に統御される関係への変動と見ておくのが穏当であろう。そして2種の変動は、開放から閉鎖を経て再び開放に至る往復運動の間で、いったん閉鎖を経る中で、無自覚・自明から自覚・自律へと動く、と組み合わせ考えることができるであろう。無自覚・自明から自覚・自律へと動くことは、ときにそれこそ実存の変革ともいべき事態となる。そこを通過するために、いったん閉鎖的な関係に入り、そのなかで自覚・自律への動きが行われると見るわけである（“さなぎ”とたとえられる由縁でもある）。そうする時この過程は、イニシエーションにおける、分離・過渡・統合の過程と重なり合う。

社会との関係も同様である。例えば社会的役割について、青年以前には自覚的であることは要請されず、自ら問うことのない自明のことであってかまわない。そこから青年期を経て役割取得をなしていくならば、これは一方向的な動きである。一方青年を「マージナル・マン」として捉える見方では、いったん周縁的存在となり、後に内部に参入してくるので、往復運動的な動きである。これも親との関係において考えたのと同様に、無自覚・

自明から自覚・自律へと動くために、いったん周縁的位置をとると見るわけである。これもやはり3段階の過程と重なる。

また、仲間関係については、保坂・岡村(1992)が、gang-group から chum-group を経て peer-group に至る、という発達過程を示している。この過程については、chum-group から peer-group へと動く時点が、無自覚・自明から自覚・自律へと動く時点に対応していると見られる。

こうして挙げられた事象が、青年期にイニシエーション的体験をとおして発達をとげるとする場合の、そこに要請される体験であり、その配列と関連づけと考えられる。

しかしながら、この構図そのままに体験されることはむしろ稀であろう。再三述べた社会的・制度的不可能性ゆえに、これらの事象は社会的文脈や位置づけ、また意味づけを失い、あたかも断片のように浮遊している。個々人は、それと知らずこれらに遭遇する。そのときこれらはその個人においてイニシエーションを発動する契機としての動きを起こすのであるが、生起するタイミングや順序、他の体験との相互のつながりも確かでないままの遭遇であることが多い。イニシエーションは不完全な形で発動し、その全貌は定かならず、意味は明らかにされないまま、個々人をその体験に呼び込んでいく。岡田が列挙した青年の行動も、多くはこのような体験となり、イニシエーション的体験として十分なものになっているとは思われにくい。

教育や臨床の実践においては、個々人における行動や内的世界を、イニシエーション的過程に赴きつつあるか否か、過程上にあるとすればどの程度それは進行しているものであるか、また、過程を通りきるためには本人あるいは周囲に対して何が必要でいかなるアプローチが考え得るか、見とおす目を持たねばならない。岡田や東山の試みは、まさにその見とおす目を養うためのものなのである。

そのように考えるとき、岡田が行った、段階や要素が行動に現れているさまを見いだす作業は、イニシエーション的過程の必然性と困難性とが同時にはらまれたものとして、すなわち、その現れと問題とを併記する形で整理し直す方が、より展望が見えるように思われる。これを試みに3段階についてのみ展開して示す(4要素や他の要素にも展開し得るが紙幅の関係で省略する)と以下のようなだろうか。

(1) 分離

① その現れ

岡田は、規則破り、破壊、旅行、家出、の中に分離の

段階が現れている、としている。加えて、反抗、ふさぎ込み、閉じ込め等にも、この段階の現れを見ることが可能であり、変身願望や集団への参入にこれが現れることもあろう。俗語、隠語等を身につけ、用いることにもこの動きが寄与しているであろう。

② 自体の困難

このような分離方向の動きはつねに、それを阻む方向の力(家庭や学校等、社会内に構造的に存在する制度には、この力が必ず存在している)を受けるが、それ自体を困難と言うことはできない。それらと拮抗することなしに、分離と言い得る体験とはならないからである。このような力はむしろ必要である。しかし、少子化や社会的均質性の高まりが、この拮抗のバランスを、分離方向にかなり不利なものとしている傾向は指摘してよいであろう。

また、分離する以前の状況が安定的でない場合、分離そのものが、いつどこから何に対してなされるものなのか不分明となり、分離として体験される度合いが低くなる。ここにおいて、現代の学童期、少年期がはたして安定的であるかどうか問われねばならないであろう。

③ 他事象との関係での困難

まず、移行との関係で困難がある。分離したものの移行まで待たれることがなく、移行を見る前に引き戻される、あるいは自ら引き戻す。分離をなるべく先送りしようとする。このような困難には、後述する聖所や権威者・絶対者との関係での困難が関わっていると見こともできる。

ついで、聖所との関係がある。分離して向かう先は聖所であるが、価値相対的・価値消費的ともいえる現代社会では、聖性を見いだし得る場は得難くなっている。

④ 困難の現れ

家族に対する依存のあり方に無自覚さがあったり、自明なものだけしているとき、そのような状態がいつまでも続くとき、そのことを、分離の段階が未完成である、あるいは先送りしている状態の現れとしてみるができる。また、社会との関係において、やはり無自覚・自明の状態ばかりが続くとき、やはり分離の未完成や先送りをみることができる。あるいは、保坂・岡村の示すように、高校生や大学生における gang-group 的行動に、分離の先送りされた様子みることができるであろう。

(2) 過 渡

① その現れ

岡田は、特有の服装や髪型にこだわることを挙げているが、この他あらゆる対象への傾倒や没頭(有名人への熱中や同一化、暴走族への加入、宗教への傾倒等)を、

この過渡の段階の現れとして見る事が可能である。また、やや穏やかな形として種々の趣味や嗜好に熱中していくことのなかに、過渡の現れを見ることもできよう。嗜癖（有機溶剤、薬物等も含む）をこの観点から捉えることも可能であろう。また、価値の否定や逆転、両義性もこれらの行動のなかにしばしば現れる。

② 自体の困難

傾倒や没頭の対象となる可能性のある存在は、現代においては事欠かないともいえる。しかし、それが、過渡たりうるほどに存在をかけるものであるかどうかは保障の限りではない。選択の多さや流行消尽の速さは、時に傾倒や没頭にとって、むしろ斥力としてはたらくように思われる。

一方、価値や構造に対する境界性を体験することについては、価値や構造自体が確固としていない場合、体験として実感し難い。確固とした価値や構造があってはじめて、それに対する境界性ということが成り立つからである。

③ 他事象との関係での困難

まず、分離でみた聖所との関係での困難がそのままあてはまる。聖性が不確かであるとき、過渡も貫徹し得ない。

つぎに、権威者・絶対者との関係での困難がある。権威者・絶対者の確定や存立自体が困難であり、それゆえに、過渡における力と守りとが保障されないことが多く、やはり貫徹を見ないことになる。

さらに、伝承・神話との関係での困難がある。過渡の範例は伝承・神話の中で見いだされるものである。しかし効力ある伝承・神話が見だし難く、適切な過渡の範例を得ることがなかなかできない。

④ 困難の現れ

十分な程度の傾倒や没頭が得られないことは、あらゆる活動（クラブ、サークル、アルバイト等）に対するコミットの乏しさ、あるいはコミットのうつろいやすさとして現れることがある。

また、Turnerが境界性の特徴や、コムニタスの特徴として挙げた諸事象の体験、たとえば、荒野なり暗黒なりに象徴されるような体験が、実感の希薄なもの、あるいは疑似的なものにとどまりがちであることも挙げることができる。ここにも過渡の困難をみてとることができる。逆に、それらの特徴の一面（たとえば、性別の極小化であるとか、均質性であるとか、匿名であるとか）のみに、極端でアンバランスかたちで青年をとらえることもある。ここにもやはり、境界性やコムニタスをトータルに体験することの困難さと、それでもなお境界性やコムニタスの体験を求めたい心性とを見いだすことができ

る。青年が作ったり所属したりする仲間や集団に諸病理がみられる（過度の均質性希求、過度の全面的服従、あるいは逆に、集団をなす事自体が苦手であったり、帰属できなかったりすること）とき、やはりこの段階の困難を見いだすことができる場合もある。

ただしこれらの困難については、形や実感が希薄であるということが現象の本質でもあるだけに、その存在を可視的な形で拾い上げ難いものでもある（いじめと呼ばれる現象の、あるものはそうであろう）。

嗜癖、陶酔、埋没、崇拜、あるいは閉鎖集団等をめぐって病理的現象がみられるとき、そこに、この過渡の困難をみることもできる。たとえば、権威者・絶対者あるいは伝承・神話を希求するあまり、質的に保証されない疑似的对象であっても、それに飛びついてしまう病理を挙げることができる。

(3) 統合

① その現れ

岡田は職業につくことに、この段階の現れをみるが、青年期に終止符をうつあらゆる事象がこれに相当するとしてよいであろう。結婚や定職、定住、定収入といった定状態を得ようとするあらゆる動きのなかに、これを見ることができる。ここに至る過程で、個々人は、その生きる世界のなりたち、原理（いわば伝承・神話にあたる）をものにしておこうとする。また、越えるべき試練に出会うこともある。

② 自体の困難

本来ならば、統合段階にある者の社会的位置は相対的に安定であるはずだが、現代ではその統合先である社会自体の安定性・恒常性が保証されていない。進歩、変動、複雑化の相のもとに常にあるため、統合とはどこに至ることを指すのか、定まることがない。

③ 他事象との関係での困難

まず、伝承・神話との関係で困難がある。統合がなされるには、統合されていく先の世界が伝承・神話によって完全に説明され支えられていることが必要であるが、歴史も科学も書き直されつづける現代、そのような機能を十分に果たす伝承・神話を我々は（少なくとも集合的には）もつことができないでいる。

つぎに、試練との関係で困難がある。本来試練は肉体的なものが多いために、多くは一回性のものであり、それだけの重みある象徴性をその一回に託していたのであった。現代では、このような重みに相当する体験を一時に得る機会には乏しい。

また試練との関係では、伝承・神話と同様の困難もある。試練に象徴されるのは、統合後の社会参加が可能な

主体となった証である。そのような意味で有効な、すなわち、これが成しえたら参入に足る主体である、と言えるような象徴を我々の社会は持たない。そもそもなにが試されることをもって承認と言えるのか、定かでない。

④ 困難の現れ

モラトリアムの語のもとに論じられた諸現象を、この困難の現れと見ることができる。定職をもたないこと等に加え、晩婚化のなかにそれをみてもよい。

諸富 (1996) に挙げられている、新興宗教入信者と一般大学生とに共通する心性は、おもにこの段階における、伝承・神話や権威者・絶対者をめぐる希求と困難とに由来すると見ることできる。

また、肉体や身体像をめぐる歪曲、変形、加工 (ピアスの多用など)、とそれをめぐる障害 (アレルギーなど) には、試練への希求と困難とをみることもできる。

以上のような展開はさらに可能であるが、これらいわばいずれも仮説である。したがって今後の展開においてはデータが要請されてくることになる。

ここでは今後、いかなる方法でのデータが要請されるのか、展望をもっておきたい。それには、下山 (1996) による整理が有効である。下山の方法は、データについて、〈収集の場〉と〈収集の方法〉と〈処理の方法〉との3段階を考え、これに〈研究のタイプ〉という段階をくわえた4段階それぞれの次元を独立したものとし、各段階ごとに分類をほどこしたうえで、それぞれを組み合わせることで、方法論のパリエーションを整理しようという試みである。〈収集の場〉に関しては、実験・調査・実践に3分される。〈収集の方法〉については、検査・観察・面接に3分される。〈処理の方法〉は、記述的か分析的かの軸と、質的か量的かの軸とで、4分される。

〈研究のタイプ〉は、仮説生成か仮説検証かの軸と、個性記述か法則定立かの軸とで、やはり4分される。そうすると、先の目的に適する方法は、各段階における分類の、それぞれどこにあたるであろうか。

〈収集の場〉は、現実を統制する実験では有り得ず、調査ないしは実践となろう。〈収集の方法〉は、行動を見る観察と、会話をを用いる面接とになろう。検査は適合しないであろう。〈データの処理〉は、質的に、記述的になされるのが適している。そして〈研究の目的〉は、この過程があくまで個人において起きるものである以上、まず個性記述であり、仮説モデルの生成か検証かといえば、第一にはまず生成であろう。今回試みに描いた構図や行動理解の展開自体を、まずは磨かねばならないであろうから。まとめれば、個性記述の仮説モデルの生成を目指すデータ収集であり、場としては調査か実践、

方法は観察か面接、データ処理は質的に記述的になされるものである。今後、このような方法によるデータが待たれる。

4. 付 記

さて、前節でいささか触れたことではあるが、青年期の現代を考えると、それに先立つ発達段階の現代性をも考えねばならないことを、結びにあたって再度指摘しておきたい。イニシエーションを鍵語とするとき、それに先立つ時期、子どもの時期は確固とした状態にあるという前提が、あたかも自明のものとしてされているかのような印象を受ける。しかしながら、少年期論・学童期論の現在は、それをゆるすのであろうか。ここにおける現代的特性は (たとえばいわゆるギャング・エイジは現代もその通り存在するのか、というような問題である) あるいは、青年期の問題をさらに複雑に考えねばならなくしているのかもしれないのである。

文 献

- Eliade, M. 1958 Birth and rebirth. Harper and Brothers Publishers. (堀一郎訳 1971 生と再生 東京大学出版会).
- 福井康之 1980 対人恐怖と青年期の Initiation (通過儀礼). 愛媛大学教育学部紀要 第1部 教育学科 26, 77-90.
- Henderson, J.L. 1967 Thresholds of initiation. Wesleyan University Press. (河合隼雄・浪花博訳 1985 夢と神話の世界 通過儀礼の深層心理学的解明 新泉社).
- 東山弘子 1990 青年期女子のイニシエーション. 氏原寛・東山弘子・岡田康伸編 現代青年心理学 男の立場と女の状況 培風館, Pp.139-155.
- 樋口和彦 1986 「永遠の少年」元型/女神の元型 山王出版.
- 保坂亨・岡村達也 1992 キャンパス・エンカウンター・グループの意義とその実施上の試案 千葉大学教育学部研究紀要 40, 113-122.
- 河合隼雄 1975 心理療法におけるイニシエーションの意義 京都大学教育心理相談室紀要 2 (河合隼雄 1986 心理療法論考 新曜社, Pp.53-63).
- 河合隼雄 1983 大人になることのむずかしさ 青年期の問題 子どもと教育を考える 2 岩波書店.
- 河合隼雄 1989 生と死の接点 岩波書店.

- 河合隼雄 1991 イメージの心理学 青土社.
河合隼雄 1992 心理療法序説 岩波書店.
河合隼雄 1993 ブックガイド心理療法 河合隼雄が読む 日本評論社.
河合隼雄 1994 青春の夢と遊び 岩波書店.
河野博臣 1977 生と死の心理 ユング心理学と心身症 創元社.
川崎克哲 1988 イニシエーションから見た対人不安. 山中康裕・斉藤久美子編 臨床的知の探求 河合隼雄教授還暦記念論文集 下, Pp.185-202.
諸富祥彦 1996 カウンセラーが語る自分を変える <哲学> 教育開発研究所.
永井徹 1989 青年期におけるイニシエーションの意味について. 東京都立大学人文学会編 人文学報 205, 39-51.
中島義実 1992 イニシエーションの現代的雙貌 実存変革事件の元型と発達記述の標準モデル 千葉大学教育学部専攻生報告書 (未公刊).
中沢新一 1995 哲学の東北 青土社.
浪花博 1976 イニシエーションの現代的意義 心理治療の立場から 仏教大学研究紀要 62, 119-142.
小口偉一・堀一郎 (監) 1973 宗教学辞典 東京大学出版会.
岡田康伸 1990 青年期の男性のイニシエーション. 氏原寛・東山弘子・岡田康伸編 現代青年心理学 男の立場と女の状況 培風館, Pp.115-137.
下山晴彦 1996 心理学における実践型研究の意義 臨床心理学研究法の可能性をめぐって. 心理学評論 39, 315-337.
高橋恵子 1984 自立への旅立ち一ゼロ歳～二歳児を育てる 子供と教育を考える9 岩波書店
豊田園子 1986 男子大学生のイニシエーションの夢. 日本心理臨床学会編 心理臨床ケース研究 4 誠信書房, Pp.219-236.
Turner, V.W. 1967 The ritual process. Wesleyan University Press. (富倉光雄訳 1974 儀礼の過程 思索社).
van Gennep, A. 1909 Les rites de passage, Etude systematique des caremonies. Librerarie Critique. (綾部恒雄・綾部裕子訳 1977 通過儀礼 弘文堂).

(1997年9月16日 受稿)

ABSTRACT

Institutional Difficulty of Initiation and Individual Encounter with its Moments in Modern : A Review on Arguments about Adolescents Using "Initiation" as a Key Word.

Yoshimi Nakashima

Arguments about adolescents using "initiation" as a key word were reviewed. In Japan, the arguments started with interpreting a work in psychotherapy (Henderson, 1967). Kawai (1986) used the word as a key word in his argument about adolescents for the first time. Recently, Kawasaki (1988), Okada (1990), and Higashiyama (1990) developed the argument to the method of understanding adolescents' behaviour. Following these arguments, qualitative and descriptive data form the point of view of both its inevitability and its difficulty is expected.

Key words ; initiation, development, adolescents, modern society